

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成26年 9月16日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局 霊長類研究所

職 名 所 長

氏 名 平 井 啓 久

助成の種類	平成26年度 ・ 研究成果公開支援 ・ 国際会議開催助成		
事業内容	(和文)第4回アジア霊長類国際会議ーアジアにおける霊長類の多様性と保全研究 (英文) Diversity and Conservation of Asian Primates. The 4th International Congress on Asian Primates.		
開催期間	平成26年8月18日 ～ 平成26年8月21日		
開催場所	インドネシア共和国・ボゴール市		
参加者	総数 150人	内 訳 京都大学学内22人、その他日本国内(4人)、タイ(4人)、中国(3人)、マレーシア(2人)、シンガポール(2人)、アメリカ(3人)、フランス(1人)、ドイツ(1人)、スイス(1人)、インドネシア(ボゴール農科大学45人、その他研究・教育機関62人)	
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input type="checkbox"/> 無 <input checked="" type="checkbox"/> 有(経費明細・参加者リスト)		
会計報告	事業に要した経費総額	4,000,000 円	
	うち当財団からの助成額	1,000,000 円	
	その他の資金の出所	(機関や資金の名称)	国際交流推進機構基盤強化経費
	経費の内訳と助成金の使途について		
	費 目	金 額 (円)	財団助成充当額 (円)
	旅費交通費	2,348,500	1,000,000
会場費	1,410,750	0	
印刷費	197,550	0	
謝 金	43,200	0	
当財団の助成について	おかげさまで無事、会議も予想以上の盛況のうちに終了しました。当初の予定から参加人数が激増したため、会場費も大幅な増額になりましたが、参加者の旅費等は一部減額したものの、助成をいただいたおかげで滞りなく執行することができました。今後も会議主催や交流計画等もありますので、引き続きご支援いただければ幸いです。		

このシンポジウムは隔年で関係者が開催している「International congress on Asian primates」の第4回として、8月11日～16日にベトナム・ハノイで開催される第25回国際霊長類学会にあわせて実施された。また、京都大学とボゴール農科大学の大学間協定が2013年8月に締結された1周年を記念して両大学の合同シンポジウムという形をとった。

最終的な参加人数は霊長類研究者と学生あわせて150人にのぼった。京都大学内の講演者(14人)を中心に、タイ(4人)、中国(3人)、マレーシア(2人)、シンガポール(2人)等のアジア各国の代表的な研究機関から参加者と意見を交換した。また、欧米各国からもアジアの霊長類を対象としている研究者が参加し、それぞれの研究発表を行った。さらに開催地となったインドネシア・ボゴール市のボゴール農科大学からの参加者に加えて、ジャカルタ、バンドン、バリ島等、インドネシア各地から研究者や学生が参加して活発な討論を行った結果、当初の予想以上に盛会となった。特にインドネシアを中心とした大学生・大学院生の参加が非常に多く、これからの研究の発展に明るい材料となった。

口頭発表は41演題が発表された。初日は京都大学の三嶋理事とボゴール農科大学の Sri Nurdianti 数学・自然科学学部長の挨拶の後、平井霊長類研究所所長の基調講演を中心にゲノム関連のセッションで活発な討論が行われた。第二世代シーケンサーの運用が本格的になり、ヒトを含めた霊長類の研究現場での研究成果や計画が報告された。また、その後感染症関連のセッションでは、ヒトと野生霊長類の間での共通感染症の話題等が報告された。このうち、霊長類研究所の Michel Huffman 准教授の発表に関しては、インターネットでも報道されるほど話題を集めた。

二日目は、テナガザルとオランウータンに関する発表が大部分を占めた。DNAの繰り返し配列、音声コミュニケーション、ハビタットの分断化と生息地の関連、古文書を利用した過去の生息地の推定など、多面的な取り組みが紹介された。テナガザルの生息地保全を志向した調査、ジャワテナガザルの生息地で栽培されるコーヒーの販売を通じた保全活動への取り組みなどが紹介され、会場からは多くのコメントが出された。オランウータンのセッションでは、彼らの地上利用行動の詳細とその至近要因、カメラトラップを活用した密度推定など、オランウータン研究の最前線が紹介され、とくに大学院生から積極的な質問があった。保全のセッションでは、アジアの熱帯林の消失の変遷についての広域調査、インドネシアで観察された霊長類と有蹄類の種間関係、中国におけるウンナンキンシコウの生息地保全などが報告された。

三日目以降は、Human Culture、Morphology、Phylogeographyのセッションが行われた。Human Cultureの2演題は、それぞれ、インドネシアで出土するホモ・エレクトスの道具についての報告、およびヒト社会に見られる同性愛と社会階層、および昇嫁婚の関係についての発表であり、ヒト以外の霊長類に関する研究成果が大半であるシンポジウムにおいてはやや異質であったかもしれない。しかし、特に Michel Raymond 教授(モンペリエ大)による後者の演題は、同性愛が選択される社会システムに関する大胆な仮説を提示するもので、生理学、生態学、社会学といった多分野の研究者の関心を呼び、多くの質問・コメントがなされた。

Morphologyのセッションでは、インドネシア人の体型変化についての報告を含む3演題が報告された。インドネシアの形態学ではヒトの体型に関わるものが主流であり、ポスターセッションにおいても、若手研究者によるこのテーマの精力的な研究成果が開示されていた。その多くは、京都大学で教育を受けた研究者が帰国後に育てた学生によるものであり、国際交流によ

る芽が順調に育ちつつあることが実感された。残る2つの発表は、日本人参加者によるもので、運動・形態解析の新手法の紹介、およびアジア霊長類の尾の形態に関する報告であった。前者は、従来の手法とは全く異なる新たな発想に基づく解析法を提案するものであり、霊長類の運動や形態の非侵襲的研究を容易にするとともに、絶滅危惧種の形態・行動のデジタル保存の可能性も感じさせた。尾の形態の報告も、従来の形態学にはとらわれない、発生学的手法による解析を目指しており、今後の発展が待たれる。こうした研究は日本以外のアジア諸国ではあまり行われていないが、その分関心も高く、質疑応答の時間を越えて活発な議論があった。今後の国際的な交流が期待できる。

Phylogeographyのセッションでは、カニクイザル (*Macaca fascicularis*) とアカゲザル (*M. mulatta*) の文化伝統と系統発生、とくに遺伝子流動のもたらす進化について、知見の交換があった。アカゲザルは中国からインドまで広く分布するが、形態学的特徴では尾長の違いによって東西グループに分けられるにすぎない。形態の共通化は、オスによる広範な遺伝子流動である。母系遺伝のマーカではミャンマー・バングラデシュ・インド東北地方の分布の中間地域に新旧のクラスターが見出され、古くからの分散があったことが示唆された。インドシナ半島で両種は、古くから現在まで交雑しており、特に両種を分類する良い指標のStat6マーカを用いると、これまで考えられていた境界帯より広範な交雑が認められた。またカニクイザルのミャンマー亜種 (*M. fascicularis aurea*) は、アカゲザルやカニクイザル基亜種とも異なる系統をなし、亜種より上の分類群であることが初めて示唆された。この亜種は貝・カニ・堅果を、さまざまな石器を適宜使い分けて割って食するという文化をもつ。その分布はミャンマーのヤカインからタイのプーケットまでのベンガル湾・アンダマン海岸、および一部タイ湾側にもあることが報告され、この「石器文化」の最新の知見について活発な議論が行われた。

また、ポスターセッションでは60題の発表申し込みがあり、とくに地元インドネシアの大学院生の発表が大部分を占めた。各セッションの間に、それぞれのポスターについて5分ずつの紹介時間が与えられ、各発表者は取り囲む聴衆に緊張しながらも英語で自分の研究をアピールしていた。若手・中堅を問わず質問があり、非常に良い雰囲気での議論がなされた。一人一人のポスターを参加者が順番に見て回る、という形式は、大学院生のエンカレッジメントという意味でも非常に有効だと考えられ、次回以降も取り入れるべきだろう。

このようにサブタイトルにあるゲノムから文化までの幅広い話題について活発な議論が展開され、参加者にも好評な盛会であった。